

断片

伽藍堂

僕としてはさつき見た映画の話などは本当にどうでもいいことであつて出来ることならば今すぐに会計を済ませてホテルへ向かうことをしたいのだけれどもルリコには全くそのそぶりは無く飽きもせずに主演男優の魅力について延々と語り続けてくれる。僕にはさつきの映画はよくある安っぽい恋愛映画であるとしか映らなかつただけけれど、ルリコの話しぶりは映画史に残る傑作であるかのごとくであり、さつきの映画への賛辞が尽きることなく続いてゆく。僕はカルボナーラを食べながらルリコの話聞いていたけれど、僕の興味は主にルリコの顔、そしてルリコのカラダと続く。映画のことなどずいぶんと低い優先度だけれどルリコはそんなこと分かつてないようだ。僕はホテルに着いてからどうしようかとそのことばかり考えていてルリコの話には適当に相槌を打ち、機械的にフオークを動かしてカルボナーラを食し、一定間隔でコーヒーを胃に流し込んでいた。ルリコが映画の話を経々と続けるほど僕は頭の中がルリコの美しい姿で一杯になつていて僕の中のルリコはもう何も着てはいない。だからカルボナーラの胡椒の一つが動いていると思つたけれど

よく見れば小さな羽虫だったとかそんなことはどうでもよかつたけれど、さらによく見るとルリコの今まさに食べているケーキの白いホイップクリームの上で白い小さな虫がばたついているのを見つけてしまった。

自分の食べるものならば無視していればいいのだけれど、ルリコが虫に気付いてしまうと気分を壊したとか言つてホテルに行かないかもしれない。それは非常に困る。ルリコの食べる速度からするとあと二口ほどで哀れな虫はルリコの白歯によつて押し潰され、すり潰されることになる。何も気付かずそのまま映画の話を続けてくれるのならばひとまずは安心なのだけれど、妙な所で勘のいいルリコは気付いて大騒ぎするかもしれない。だからといつてこの場をどうにかする解決策が浮かぶわけではなくああだこうだと考えているうちにルリコのほうからアクションがあつた。

「だからね、あのシーンで……えつ、あつ、ぎやつ、きやあつむむむ虫つ、虫つ虫つ虫つ」

そういった彼女の手にあるフォークの上にはケーキと、最後の必死の抵抗が成功したばかりの哀れな虫がいる。「とつとつ、トイレ、トイレは、トイレどこつ」

店内の注目を集めることも気にせず店員にトイレの場所を聞くと店の端のトイレへと駆け込んでいく。一人取り残された僕は店内の好奇の目に晒されていたのだけれど、僕にとっては今日ホテルへ向かうことは出来なくなつたろうなということの方がダメージである。

ああ本日最大の楽しみを失つてしまい僕はどうして今日一日過ごせばいいのだろうと絶望に打ちひしがれていたのだが、本日二回目の叫びがそれを中断させた。

「ぎえ、ぎゃ、ぎゃあああああ。ぐつ、ごつ、がつ、

ぎゃあああああ。ぎゃつぎゃつぎゃぎゃあああああ」

それはルリコの声とは到底思えないルリコからはかけ離れた声だったが、ルリコが駆け込んでいったトイレから鳴り響いたこと、この店のトイレは一人しか入れないことを考えるとやはりその声の主はルリコなのだろうと僕には思われた。そう考えた直後、その考えは正しいと証明されたのだが、トイレから出てきたのはそれをルリコと認めるのはいささかためられるものであった。それはルリコの着ていた白いワンピースを着てはいたが、顔が醜く歪み、黒い髪は振り乱され、そして何よりもためらわれた要因はそれが全身に撒き

散らしている吐瀉物である。吐瀉物は白いワンピースに模様のように飛び散り、それが歩いた後に足跡として残り、その手と前腕部に多量にまとわり付いている。しかしその後それがとつた行動はそれをルリコと認識させるに十分なものであった。

「シ、シン。シン。た、たた、助けて。む、虫。トイレ。ゲロに」

僕の名前を呼びながらまっすぐにこちらへ近寄ってきたそれはやはりルリコである。そしてルリコは吐瀉物にまみれたカラダで僕に強く抱きついてきた。強いすえた匂いと共にルリコに包まれた僕は勃起し、嘔吐した。ルリコの頭は僕の吐瀉物にまみれ、周りの客は大騒ぎをし、そして僕は胃液とカルボナーラと後何か分からないものの混合物であるところの吐瀉物をさらにルリコに向かって撒き散らし、僕は興奮のあまり射精した。数秒後僕達は、店を出た。

公園で身体を流し、ルリコを落ち着かせるのは骨が折れた。そして落ち着いたルリコは話し出した。

「あつ、あのケーキにむつ、虫がいて。びっくりしてトイレに行って吐いたら、そつその中に、ゲロの中に

虫が、むっ、むっ、虫がうじゃうじゃいて。あの、ほんとにうじゃうじゃいたの。もっ、もう、わわわ、私の身体の中にはむっ、虫が一杯だわ、死ぬんだわ、あ、もう死ぬんだわ」

普段なら一笑に付していそうなところであるが、実際にいるのである。彼女の吐瀉物に大量に、そして僕の吐瀉物にも多少混じっている。それは吐瀉物の中でうごめいて、ばたついている。

「こ、こ、これはあれだよ。さっきの店の食事に、む、虫が、虫がいつぱい、入ってたんだよ」

僕も自分自身に自分の言ったことを言い聞かせ、体内に虫が沢山住んでという考えを振り払った。実際あの店の料理に虫が入っていたのだ。きつと気付かずに入っていただけで多くの虫が入っていたに違いないのだ。そう考えているときさらに吐き気がこみ上げてきて吐こうとしたが、胃にほとんど何も残っていないらしく、ぼとぼとと数匹の虫が口からこぼれただけだった。ルリコはあの後数回吐いたのだが、それらは通常のそれではなく、胃液と虫の混合物であった。彼女の吐いた虫の量は大雑把に見てもあの店で食べていた食事の

量を超えているのではないのか、そう考えてしまい、僕は不安にとらわれた。

「最近、変なもの食べたとかしなかった？」

聞いては見たもののあまり意味のある問い掛けとも思えなかった。案の定ルリコの答えは食べていないとの答えだった。もう何かほかの事を考えたくなり、僕は彼女の美しい黒髪を眺めることにしたのだが、なにやら様子がおかしい。彼女の髪が動いているのだ。風でなびいていのであるとかそんなことではない。何かうごめいているのだ。そして顔を髪に近づけてそれが何かが分かった。ルリコの黒髪はすでにルリコの黒髪ではなく非常に小さな虫が大量に集まっているのである。そして僕は黒髪に手を伸ばしてしまった。ルリコの黒髪はあたり一面に広がり、飛んで、這つて、散つていった。僕もルリコも何が起こったのか理解が出来なかった。僕はとつさに自分の髪を触り、引っ張り、安堵した。そしてルリコは自身のまばらになりほとんど残っていない自身の頭髪を正しく認識する前に新たな厄災に襲われた。

「むっ、虫が、は、は。這つてる。か、か、身体の中

を、這つてる。腕、とか、這い回つてる」

ぎそうかん
蟻走感は通常は精神的な要因から起こることが多い感
覚だけれども、僕が見る限りルリコの腕には幾つか動
く突起がある。縦横無尽に皮膚を駆け巡るそれは、見
ているうちに数を増し、ルリコの全域を覆うほどに
なった。

「あ、あ、これ、む、む、虫、たたた、助けて。こ、
殺して。虫。こ、来ないで」

そう言ったかと思うとルリコは肌色やらピンク色やら
赤色やら白色やらの虫となりあたりに散つていった。
残された白いワンピースを呆然と眺めていると、ワン
ピースは小さな白い虫の集まりとなり、散つていった。
僕はもう、いろいろなものを洗い流したくなつて、水
道の蛇口を捻った。水道の蛇口から勢いよく水が流れ
出す。腕を、頭を、身体を洗い流そうと蛇口顔を寄せ
ると、水は水ではなく透明な虫たちが蛇口から這い出
てきて、蛇口は蛇口ではなく銀の光沢のある虫達が僕
の腕を這い回った。僕の全身を蟻走感、痛痒、つらよう疼痛が
這い回り散開し隠密し一斉に蜂起し再び隠密した。僕
はそれを振り払おうとしてバランスを崩し転倒した。

地面は、地面だったが、地面は土ではなく、僕は茶色や黄土色の小さな虫に倒れ込んだ。茶色や黄土色の小さな虫は僕の目前に大きかった。鼻と口から虫が入ってきた。止めようにもその術はなく僕はされるがまま僕の中に虫が入ってきた。鼻と口と胃は虫が常に這っていた。ズボンの中を這って肛門から腸を満たすのも時間の問題だろう。口と鼻だけでは狭すぎたのか目からも耳からもなだれ込んできた。鼻の奥を破り脳を満たすのも時間の問題だろう。もう数を数えるなどという行為が無為なほどの虫が僕に入ってきた。いや、しかしこの状態を鑑みるに僕の方が入っていく最中、虫に割り込み、混じっているのではないか。そうこうしている僕と僕は地面であった。地面は街であり、町であり、村であり、草原であり、森であり、砂漠であり、海底であった。僕は地面であり、僕は身体感覚を感じた。僕の身体は大きく動き、そして大きかった。僕の脳裏にまんまるい地球の姿が映った。耳をつんざくような羽音が、鳴り響いた。

断片

初出 『混凝土の隙間と奇譚集』 2008年12月30日 発表

2010年5月9日 公開

著者 伽藍堂

編集人 今出川潤

連絡先 vert@bugyo.tk

企画・制作 ver.T

<http://vert.bugyo.tk/>

このお話はフィクションです。
本作品に関する諸権利は著者自身に帰属します。
転載、引用される場合は著者および出典の表示をお願いします。